

令和4年度 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：上川地区
- 2 事例報告学校名：愛別町立愛別小学校
- 3 報告者職・氏名：校長 長谷 一 哉
- 4 キーワード：地域・学校間の連携・協働による学力向上の取組

1 はじめに 学校の概要

愛別町は、旭川市から北東へ約30km、大雪山連峰を筆頭とする山々に囲まれ、石狩川と愛別川、その支流を含む54本の川が流れる場所にある。稲作を核に、きのこ栽培と畜産などの産業が盛んな町の市街地にある小規模校である。

平成22年に小規模の小学校3校を統廃合し、町内に、小学校・中学校1校ずつの配置となった。小中連携・一貫教育に応える総合的な教育計画策定のため、愛別町振興計画の構想に即し、本町の教育目標「心の豊かさを求め、自己の充実と生活の向上を図り、伸びゆく町づくりを目指して」の実現に向け、町民の信頼に応える教育行政を推進している。その方針を受け、幼児センター及び北海道美深高等養護学校あいべつ校と、学校間連携プラン「新 愛×愛プラン」を柱に、幼・小・中・あいべつ校による連携教育推進委員会での活動を行い、学校運営協議会についても、幼・小・中合同の組織で取組を行っている。

本校は、今年度、重点目標を「動」とした。教職員及び保護者・地域が「発動」「躍動」「感動」しながら、教育目標「ひらく子」と、目指す学校像「笑顔、愛と感動のステージ 愛別小学校」にせまるための教育活動を展開している。

2 連携教育推進委員会の取組

教育委員会職員（学校教育係長と教育推進アドバイザー）と、幼・小・中・あいべつ校の教員が、経営委員会、学力向上部会、研究推進・連携授業部会（研究・音楽・英語・体育）、生徒指導部会、学校種間交流部会、特別支援部会に分かれて、4つの校・園で連携を図った活動を行っている。

学力向上部会は、児童生徒の学力・体力面での現状を共有し、小・中の教育課程の連携・一貫に向けた改善を進めることを目的にしている。教務主任同士がタッグを組み、義務教育9年を見通したカリキュラムの編成改善と、キャリア・パスポートの改善、愛別風授業スタンダードを基本としたICT活用による授業の定着についての研究交流を行っている。

研究推進・連携授業部会は、授業改善に関わり、小・中連携した研究課題の共有や、指導に関わる交流・協議をすることを目的にしている。それぞれの研究部長が中心となり、ICT機器を用いた効果的な授業と「主体的・対話的で深い学び」の授業についての研究を行う。また、教科担当同士も連携しており、外国語科では、小学校の全ての時間に中学校教諭の乗り入れ授業を行っている。音楽科では、小学校での金管バンドへの中学校教諭の指導協力と、中学校での合唱コンクールへの小学校教諭によるアドバイスをを行っている。さらに、体育科では、新体力テスト・運動習慣調査の分析、授業の指導法交流も行っている。

学校種間交流部会では、幼・小、小・中、幼・中で連携研修会を行い、保育・授業参観を基に生活面、学習面、運動面、特別支援、連携システムについて協議を行っている。また、例年、小・中・あいべつ校合同の地域ボランティアも行い、児童・生徒同士も交流する。

教育推進アドバイザーは、高学年の算数及び中学校数学の授業補助に入り、放課後学習サポートも実施して算数・数学の学力向上の一端を担っている。

学習活動	児童生徒	教 師
<b>単元導入</b> 単元導入の場面において、本単元の課題の提示	学習内容の概観 ロイロノートを活用して、課題を解き、進捗 ありあてをつかむ場面 ○課題を知り、これまで学んだことを基に、解決の見通しをもつ	問題提示・確認 ロイロノートによる問題提示と確認 問題提示場面 ○本単元の課題を明確に提示し、解決に向けた見通しをもち、まずやらせてみる
<b>自力解決場面</b> ○個人思考	ひとりでもめる場面 ○課題に向き合い、ひとりでもじっくり考える ○自分の考えを、ロイロノートやワークシートに書く	「個人思考」活動設定場面 ○考えさせるべき内容と教えざるべき内容を明確にし、丁寧に分かりやすく教える ○「じっくり考える」時間を十分に確保する ○ロイロノートのカードを活用し、一人一人の考えを把握する
<b>協働解決場面</b> ○ペア・グループ学習 ○ロイロノートを活用した全体交流	学び合う場面 ○ペア・グループ学習、ロイロノートを活用し、互いの考えを共有することで、相対的な考えを磨き合ったり、教え合ったりする	「交流」活動設定場面 ○交流の場を明確にし、ペア学習・グループ学習、ロイロノートなどで全体交流を通して、考えの比較検討を行う
<b>振り返り場面</b> ○課題に達成したまとめ	振り返る場面 ○学んだことを振り返り、課題や学習内容を振り返る ○学んだことを振り返り、自分の言葉で振り返る ○ロイロノートの活用	「振り返り」活動設定場面 ○学ぶもたれが、授業で「分かったこと」「できたこと」「思ったこと」を整理できるように振り返りをする ○ロイロノートを活用して全体振り返りをする

3 読書活動の取組

前年度学校評価の児童アンケートから、「家で本を読むか」の問いに「よくあてはまる」と回答した児童が7ポイント減少し、34%になった。また、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答した子が25%であったため、読書活動の充実を学力向上の重点の一つとした。



読み聞かせ

新型コロナウイルス感染症のために中止していた、地域のボランティアの皆さんによる読み聞かせを復活させ、同時に、職員や図書委員会の活動だけではなかなかできない学校図書館の整備を行っていただいた。これにより、図書委員会の活動も活性化し、本の貸出しも増えた。さらに、道立図書館によるブックフェスティバルも、3年ぶりに行った。

朝読書の時間には、各教室で担任も一緒に読書をするだけでなく、校長、教頭も含めた職員室組も各学年をローテーションしながら読書を行うようにした。また、読書週間中には、新しい取組として全教員による読み聞かせも行った。

読書は、語彙力、読解力等の認知能力と、想像力、思考力、表現力、さらには、非認知能力の自己肯定感、学習意欲、集中力、持続力、忍耐力、自制心、課題解決力、リーダーシップ、協調性、回復力、創造力等の育成にも大きな力を発揮するという。

基礎的な学力として認知能力を高めていくこと、そして、それを元に、正解のない問題にしっかりと向き合っ、仲間と対話をしながら最適解を見つけていくために必要な非認知能力を身に付けることが、これからの社会を生きていく子どもたちにとっては、重要である。様々な研究の成果から、こうした力を高めるためには、乳幼児期からの子どもへの語りかけや読み聞かせ、家庭での読書環境が大きく影響することは明白である。

朝読書や読み聞かせ等、学校でできることは最大限行ったとしても、家庭での協力がなければこうした力を高めていくことは難しい。学校だより等を活用して、保護者・地域にも「家読」の大切さと協力を強く呼び掛けている。

4 校内研修によるICTを活用した取組と連携・協働

研究主題を「『主体的・対話的で深い学び』を実現するための授業改善 ～ICT機器を効果的に活用した学習活動」として2年目になる。ICT活用は「主体的・対話的で深い学び」を実現させるための手段である。昨年度は「ICT機器の効果的な活用」を中心として、教師自身が機器を活用する技能や、指導する技術を身に付けながら「主体的・対話的で深い学び」を目指したICT機器の授業実践への活用を進めた。



ICTを活用した公開授業

今年度は、前半「ロイロノートスクールを活用して主題に迫ろう」をテーマに、iPad・アプリの使い方の実技研修を進めながら、実践例の交流と蓄積を行った。後半はオンライン授業への対応を行いながら、iPadを活用した授業改善に比重をかけた研修を行った。

11月8日には、連携教育推進委員会のメンバーや学校運営協議会委員を招いて愛別町教育研究会の研究大会を開催した。1年生の体育の授業を公開し、本校の研究についての発表を行った。幼児センターやあいべつ校の連携教育推進委員、学校運営協議会の委員も研究協議に参加し、小グループでの意見交流の中で、委員からも今後の取組についての示唆をいただいた。

5 おわりに

連携教育推進委員会、学校運営協議会をはじめとする地域・学校間の連携・協働の取組は、年々内容が充実してきている。しかし、小・中学校においても、細かい部分においてはまだまだベクトルが一致しているとは言えない。町の教育行政は、これより、連携から一貫教育へ大きく舵を切っていくことになる。更なる協働で、一段高い「笑顔、愛と感動のステージ」の学力向上を目指す。